

妖魔の辻占

泉鏡花作

一

傳へ聞く・・・文政初年の事である。將軍家の榮耀其極に達して、武家の代は、將に一轉機を劃せんとした時期だと言ふ。

京都に於て、當時第一の名門であつた、比野大納言資治卿（假）の御館の内に、一日偶と人妖に齊しい奇怪なる事が起つた。

其の年、霜月十日は、豫て深く思召し立つ事があつて、大納言卿、私ならぬ祈願のため、御館の密室に籠つて、護摩の法を修せられた、其の結願の日であつた。冬の日は分けて短いが、まだ雪洞の入らない、日暮方と云ふのに、滞りなく式が果てた。多日の精進齋である。世話に云ふ精進落で、其邊は人情に變りはない。久しぶりにて御休息のため、お奥に於て、厚き心構の夕餉の支度が出来た。

其處で、御簾中が、奥へ御入りある資治卿を迎のため、南御殿の入口までお立出に成る。御前を問三間ばかりを隔つて其の御先拂として、袿、紅の袴で、裾を長く曳いて、靜々と唯一人、折から菊、朱葉の長廊下を渡つて來たのは藤の局であつた。

此の局は、聞えた美女で、年紀が丁ど三十三、比野の御簾中と同年であつた。半月ばかり、身にいたはりがあつて、勤を引いて引籠つて居たのが、此の日修法ほどき、満願の御二方の心祝の座に列するため、久しぶりで髪容を整へたのである。疊廊下に影がさして、艶麗に、然も軟々と、姿は黒髪とゝもに撓つて見える。

背後に・・・たとへば白菊と稱ふる御厨子の裡から、天女の拔出でたありさまなのは、貴に氣高い御簾中である。

作者は、委しく知らないが、此は事實ださうである。他に女の童の影もない。比野卿の御館の裡に、此の時卿を迎ふるのは、唯此の方たちのみであつた。

また、修法の間から、脇廊下を此方へ参らるゝ資
治卿の方は、佩刀を持つ扈従もなしに、唯一人な
である。御家風が質素か知らない。此の頃の恂うし
た場合の、江戸の將軍家　――　までもない、諸侯
の大奥と表の容體に比較して見るが可い。

で、藤の局の手で、隔てのお襖をスツと開け
る。・・・其處で、卿と御簾中が、一所にお奥
へと云ふ寸法であつた。

傍とも云ふまい。片あかりして、冷く薄暗い、其
の襖際から、氷のやうな抜刀を提げて、ぬつと出た、
身の丈拔群な男がある。唯、間二三尺隔てたばかり
で、ハタと藤の局と面を合せた。

局が、其の時、はつと袖屏風して、間を遮ると齊
しく、御簾中の姿は、すつと背後向に成つた　――
丈なす黒髪が、緋の裳に揺いだが、幽に、雪より
も白き御横顔の氣高さが、振り向かれたと思ふと、月
影に虹の影の薄れ行く趣に、廊下を衝と引返さる。

「一まづ。」

と、局が聲を掛けて、腰をなやかに、片手を膝に垂れた時、早や其の襖際が氣勢した資治卿の聲音の遠ざかるのが、靜に聞えて、もとの脇廊下の其方に、嚴な衣冠束帯の姿が――其の頃の御館の状も思ばれる――襖の羽目から、黄菊の薰ともろともに漏れ透いた。

藤の局は騒がなかつた。

「誰ぢや、何ものぢや。」

「うゝ。」

と呻くやうに言つて、ぶる／＼と、ひきつるが如く首を掉る。渠は、四十ばかりの武士で、黒の紋着、袴、足袋跣で居た。鬢亂れ、髻はじけ、薄痘痕の顔色が眞蒼で、兩眼が血走つて赤い。酒氣は帯びない。宛如、狂人、亂心のものと覺えたが、いまの氣高い姿にも、慌てゝあとへ退かうとしないので、ひよろりとしながら前へ出る時、垂々と血の滴るばかり抜刀の刃が、脈を打つてざらりとして、腕はだらりと垂れつゝも、切尖が、じり／＼と上へ反つた。

局つぼねは、猶豫ためらはず、肩かたをすれ違ちがふばかり、ひた／＼と寄添よりそつて、

「其方そなた……此方こちらへ。」

ひそみもやらぬまゆずみ黛まゆを、きよろりと視みながら、亂髮らんぱつ拔刀ばつたうの武士さむらいも向きむかはつた。其それをば少すこしづゝ、出で口ちへ誘さそふやうに、局つぼねは静々しじゅうと紅くれないあの袴はかまを廊下らうかに引ひく。

勿論もちろん、兇器きやうきは離はなさない。上うへの空そらの足あしが躍をどつて、ともすれば局つぼねの袴はかまに躓つまずかうとする状さまは、燃立もえたつ躑躅つゞじの花はなの裡うちに、鼬いたぢが狂くるふやうである。

「關東くわんとうの武家ぶげのやうに見受みうけますが、何どうなさつた。——此處こゝは、まことに恐多おそれおほい御場ごばしよ所よ。……いはれなう、其方そなたたちの來くる處ところではないほどに、よう氣きを鎮しづめて、心こゝろを落着おちつけて、可いいかえ。咎とがも被きせまい、罪つみにもせまい。妾わらわが心こゝろで見免みのがさうから、可いいかい、柔順おとなしく御殿ごてんを出でや。あれを左ひだりへ突當つきあたつて、ずツと右みぎへ廻まはつてお庭にはに出でや。お裏門うらもんの錠ざんはまだ下りおりては居ゐぬ。可よいかえ。」

「うゝ。」

「分わかつたな。」

「うーむ。」

「けれども、つぼね局が立停ると、かたな刀と、おくもに奥の方へ突返らうとしたから、そこ其處で、うづちぎ袷の袖を掛けて、くせ曲もの、て手を取った。それがかたな刀を持たぬ方の手なのである。あら荒き風かぜに當るまい、たをやめ手弱女の上臈じやうじやうの此この振舞ふるまひは讚歎さんたんに値あたひする。」

さてて手を取つて、そ其のまゝなやし／＼、おもてでいりお表出入ぐち口の方へ、らうか廊下の正面しやうめんを右みぎに取つて、まが一曲り曲つて出ると、すぎと杉戸が開いて居て、たみ疊の眞中まんなかに火桶ひをけがある。

そこ其處には、ふ踏んで下りる程ほどの段だんはないが、だんひく一段低く成つて居た。ために下りるのに、さか逆上さかした曲もの、て手を取つた局つぼねは、かれ渠を抱だくばかりにしたのである。だ抱くばかりにしたのだが、よ餘所目よには手負てあへる鷺わしに、たんちやう丹頂つるの鶴かいつかが搔摑かいつかまれたとも何なんともたとふべき風情ふぜいではなかつた。

をりあし折あし悪く一人ひとりの宿直士と、ばんし番士かげの影も見えぬ。警護けいごの有餘ありあまつた御館おやかたではない、わ分けて黄昏たそがれの、それ／＼に

立ちが立違つたものと見える。欄間から、薄もみぢを照す日影が映して、大な番火桶には、火も消えかゝつて、灰ばかり霜を結んで侘しかつた。

局が、自分先づ座に直つて、
「とにかく、落着いて下に居や。」

曲ものは、仁王立に成つて、じろ／＼と瞰下した。
しかし足許はふら／＼して居る。

「寒いな、さ、手をかざしや。」
と、美しく艶なお局が、白く嫺かな手で、炭びつを取つて引寄せた。

「うゝ、うゝ。」
とばかりだが、それでも、どつかと其處に坐つた。

「其方は煙草を持たぬかえ。」
すると、此の亂心ものは、慌しさうに、懷中を開け、袂を探した。それでも鞘へは納めないで、大刀を、ズバツと疊に突刺したのである。

兇器が手を離るゝのを見て、局は渠が煙草入を探す隙に、そと身を起して、翻然と一段、天井の雲に紛るゝ如く、廊下に袴の裾が捌けたと思ふと、武士は武しや振りつくやうに追継つた。

「ほ、ほ、ほ。」

と、局は、もの優しく微笑んで、また先の如く手を取つて、今度は横斜違に、ほの暗い板敷を少時渡ると、■ともみぢの緋の映る、脇廊下の端へ出た。

言ふまでもなく、今は疾くに、資治卿は影も見えない。

もみぢが、ちら／＼とこぼれて、チチチと小鳥が鳴く。

「千鳥、千鳥。・・・」

と臆たく口調みながら、半ば渡ると、白木の階のある處。

「千鳥、千鳥、あれ／＼・・・」

と且つ指し、且つ恍惚と聞きすます體にして、

「千鳥や、千鳥や。」

と、やゝ聲を高うした。

むか 向う前裁ぜんさいの小縁こえんの端はしへ、千鳥ちどりと云いふ、其その腰元こしもとの、濃こい紫むすびの姿すがたがちらりと見みえると、もみぢの中なかをくる／＼と、鞆まりが亂みだれて飛とんで行ゆく。

あたか 恰あも友呼ともよぶ千鳥ちどりの如ごとく、お庭にはへ、ばら／＼と人影ひとかげが黒くろく散ちつた。

そのとき 其時そのとき、お局つぼねが、階下かいかへ導みちびいて下り状さまに、兩手りやうてで緊しつかと、曲くせものゝ刀持かたなもつ方ほうの手てを壓おさへたのである。

「うゝ、うゝむ。」

「あゝ、御番ごばんの衆しゆう、見苦みぐるしい、お目觸めぢはりに、成なります。．．．括くくるなら、其その刀かたなを。――何なに事も情なさけが御様ただなさまの思召おほしめ。．．．亂心らんしんものゆゑ穩便えんびんに、許ゆるして、見免みのがして遣やつてたも。」

牛莠ごぼうたばねに、引括ひきくつた兩刀りやうたうを背せ中なかに背負しよはせた、御番ごばんの衆しゆうは立ちかゝつて、左右さいうから、曲者くせものの手てを引ひ張はつて遠とほざかつた。

ほつ 吻ほつと呼吸いして、面おもての美うつくしさも凄すこいまで蒼白あせしろく成なり

つゝ、階きざはしに、紅くれなゐの袴はかまをついた、お局つぼねの手てを、振袖ふりそでで抱だいでお腰元こしもとの千鳥ちどりは、震ふるへながら泣ないて居ゐる。いまの危あやふさを思おもふにつけ、安心あんしんの涙なみだである。

下々しも／＼の口くちから漏もれて、忽たちまち京中きやうちうち洛中らくちゆうは是これ沙汰さただが
―― 亂心らんしんものは行方ゆくへが知しれない。

「やあ、小法師……」

こゝで讀者に、眞夜中の箱根の山を想像して頂きたい。同時に、もみぢと、霧と、霜と、あの蘆の湖と、大空の星とを思ひ浮べて頂きたい。

繰返して言ふが、文政初年霜月十日の深夜なる、箱根の奥の蘆の湖の渚である。

霧は濃くかゝつたが、關所は然まで遠くない。峠も三島寄の渚に、憚らず、ばちや／＼と水音を立てるものがある。さみしさも静けさも、霜に星のきらめくのが、かち／＼と鳴りさうなのであるから、不斷の瀧よりは、此の音が高く響く。

鷺、獺、猿の類が、魚を漁るなどゝは言ふまい。……時と言ひ、場所と言ひ、怪しからずじいことは、さながらすさま《一狼が出て龍宮の美女たちを追廻すやうである。》

が、耳も牙もない、毛坊主の圓頂を、水へ逆に眞俯向けに成つて、麻の法衣のもる膚脱いだ兩手兩脇へ、ざぶ／＼と水を掛ける。―― 恚る霜夜に、搔亂す水は、氷の上を稻妻が走るかと疑はれる。

あはれ、殊勝な法師や、捨身の水行を修すると思へば、蘆の折伏す枯草の中に籠を一個差置いた。が、鯉を遁した畚でもなく、草を刈る代でもない。屑屋が荷ふ大形な鐵砲箆に、剩へ竹のひろひ箸をスクと立てたまゝなのであつた。

「やあ、小法師、小法師。」

もの幻の霧の中に、あけの明星の光明が、嶮山の髓に浸透つて、横に一幅水が光り、縦に一筋、紫に凝りつゝ眞紅に燃ゆる、もみぢに添ひたる、三抱餘り見上げるやうな杉の大木の、梢近い葉の中から、梟の叫ぶやうな異様な聲が響くと、

「羽黒の小法師ではないか。―― 小法師。」

と言ふ／＼、枝葉にぎわ／＼と風を立てゝ、然も、音もなく蘆の中に下立つたのは、霧よりも濃い大山伏の形相である。金剛杖を丁と脇挟んだ、片手に、

帯の結目をみしと取つて、黒紋着、袴の武士を俯向
けに引提げた。

武士は、紐で引からげて胸へ結んで、大小を背中
に背負はされて居る。卑俗な譬だけれど、小兒が何
とかすると町内を三遍廻らせられると言つた形で、
此が大納言の御館を騒がした狂人であるのは言ふま
でもなからう。

「おう、」
と小法師の擡げた顔の、鼻は鉤形に尖つて、色は
鳶に齊しい。青黒く、滑々とした背膚の濡色に、星
の影のチラ／＼と映す状は、大鯰が藻の花を刺青し
たやうである。

「これは、秋葉山の御行者。」
と言ひながら、水しぶきを立て、身體を犬ぶる
ひに振つた。

「御身は京都の返りだな。」
「然れば、虚空を通り掛りぢや。」
「」
御坊に

よう似たものが、不思議な振舞をするに依つて、大杉に足を踏留めて、葉越に試みに聲を掛けたが、疑ひもない御坊と視て、拙道、膽を冷したぞ。はて、時ならぬ、何のための水悪戯ぢや。悪戯は仔細ないが、羽ぶしの怪我で、湖に墜ちて、搦れたのではないかと思つた。」

「はゝ。」

と事もなげに笑つて、

「いや、些と身に汚れがあつて、不精に、猫の面洗ひと遣つた。チヨイ／＼とな。はゝゝゝ明朝は天氣だ。まあ休め。」

と法衣の袖を通して言ふ。・・・吐く呼吸の、ふか／＼と灰色なのが、人間のやうには消えないで、ふたつとも、其のまゝからまつて、ぱつと飛んで、湖の面に、名の知れぬ鳥が亂れ立つ。

羽黒の小法師、秋葉の行者、二個は疑もなく、魔界の一黨、狗寶の類屬。東海、奥州、ともに名代の天狗であつた。

「成程、成程、……御坊の方は武士であつた。」

行者が、どたりと手から放すと、草にのめつた狂人を見て、――小法師が言つたのである。

「然れば、此ぢや。……濱松の本陣から引攫うて持つて參つて、約束通り、京極、比野犬納言殿の御館へ、然も、念入りに、十二間のお廊下へドタリと遣つた。」

「おゝ御館では、藤の局が、我折れ、かよわい、女性の御身。剩へ唯一人にて、すつきりとしたすゞしき取計ひを遊ばしたな。」

「ほう。」
と云つた山伏は、眞赤な鼻を撮むやうに、つるりと撫で、

「最早知つたか。」
「洛中の是沙汰。關東一圓、奥州まで、愚僧が一

山へも立處に響いた。いづれも、京方の御爲に大慶に存ぜられる。此とても、お行者のお手柄だ、はて敏捷い。」

「やあ、如何な。すばやいは御坊ぢやが。」

「さて、其が過失。．．．愚僧、早合點の先ばしりで、思ひ懸けない隙入をした。御身と同然に、愚僧等御司配の命令を蒙り、京都と同じ日、先づ／＼同じ刻限に、江戸城へも事を試みる約束であつたれば、千住の大橋、上野の森を一のしに、濠端の松まで飛んで出た。かしこの威徳衰へたりと雖も、さすがは征夷大將軍の居城だ、何處の門も、番衆、見張、嚴重にして隙間がない。．．．ぐるり／＼と窺ふうちに、櫻田門の番所傍の石垣から、大な蛇が面を出して居るのを偶と見つけた。霞ヶ關には返り咲の櫻が一面、陽氣はづれの暖かさに、冬籠りの長隠居、炬燵から這出したものと見える。早や往來は人立だ。」

處へ、遙に虚空から大鷲が一羽、矢のやうに下いて来て、すかりと大蛇を引抓んで飛ばうとすると、

這奴も地所持、一廉のぬしと見えて、やゝ、其の手は食はぬ。さか鱗を立てゝ、螺旋に腕り、却つて石垣の穴へ引かうとする、抓んで飛ばうとする。揉んだ、揉んだ。――いや、夥しい人群集だ。――そのうちに、鳶の羽が、少しづつ、石垣の間へ入る。……聊かは引いて抜くが、少しづつ、段々に、片翼が隠れたと思ふと、するりと吞まれて、片翼だけ、ばさ／＼ばさ、……煽つて煽つて、大もがきに藻搔いて堪へる。――見物は息を呑んだ。」

「うむ／＼。」
と、山伏も息を呑む。

「馬鹿鳶よ、くそ鳶よ、鳶、鳶、とりもなほさず鳶は愚僧だ、はゝゝゝ。」

と高笑ひして、
「何と、お行者、未熟なれども、羽黒の小法師、六尺や一丈の蛇に恐れるのでない。こゝが術だ。人間の氣を奪ふため、故らに引込まれ／＼、やがて忽ち其最後の片翼も、城の石垣につつと消えると、い

まゝで呼吸を詰めた、群集が、阿も應も一齊に、わ
ツと鳴つて聲を揚げた。此の人聲に驚いて、番所の
棒が揃つて飛出す、麻上下が群れ騒ぐ、大玄關まで
騒動の波が響いた。

驚破、そのまぎれに、見物の群集の中から、頃合
なものを引攪つて、空からストンと、怪我をせぬや
うに落いた。が、丁度西の丸の太鼓櫓の下空地だ、
眞晝間。

「妙。」

と、山伏がハタと手を搏つて、

「御坊が落した、試みのものは何ぢや。」

「屑屋だ。」

「はて、屑屋とな。」

「紙屑買　　即ち此だ。」

と件の大箆を袖圓に搔寄せ、湖の水の星あかりに
口を向けて、松蟲なんぞを攪るやうに箆の底を、ぐ
わさ／＼と爪で搔くと、手足を縮めて搔すくまつた、
垢だらけの汚い屑屋が、ころりと出た。が、出ると
大きく成つて、ふやけたやうに伸びて、ぶるツと肩

を振^ふつて、繼^つぎはぎの千草^{ちくさ}の股引^{もひき}を割^{わり}膝^{ひざ}で、こくめに、枯蘆^{かれあし}の裡^{なか}にかしこまる。

此^この人間^{にんげん}の氣^きが、ほとぼりに成^なつて通^{かよ}つたと見^みえる。ぐたりと蛙^{かへる}を潰^{つぶ}したやうに、手足^{てあし}を張^はつて平^{へた}ばつて居^ゐた狂氣^{きちがひ}武士^{むらひ}が、びくりとすると、むくと起^おきた。が、藍^{あゐ}の如^{ごと}き顔色^{がんしよく}して、血走^{ちばし}つたまゝの目^めを二^{みは}りつゝ、きよとりとして居^ゐる。

四

此の時代の、事實として一般に信ぜられた記録がある。ぎ薩摩鹿兒島に、小給の武士の子で年十四に成るのが、父の使に書面を持つて出た。朝五つ時の事で、侍町の人通りのない坂道を上る時、大鷲が一羽、虚空から巖の落下るが如く落ちて来て、少年を引摺むと、忽ち雲を飛んで行く。少年は夢現ともわきまへぬ。が、とに角大空を行くのだから、落つれば一堪りもなく、粉微塵に成ると覺悟して、風を切る黒き帆のやうな翼の下に成るがまゝに身をすくめた。はじめは雙六の繪を敷いた如く、城が見え、町が見え、ぼうと霞んで村里も見えた。やがて渾沌瞑々として風の鳴るのを聞くと、果しも知らぬ渺々たる海の上を翔けるのである。いまは、運命に任せて目を瞑ると、偶と風も身も動かなく成つた。我に返ると、鷲は大なる樹の梢に翼を休めて居る。が、
 「山の峰の頂に、さながら尖塔の立てる如き、雲を貫いた巨木である。片手を密つと動かすと自由に動いた。

時に、脇指の柄に手を掛けはしたものの、鷲のた
めに支へられて梢に留まった身体である。――
殺しおほせるまでも、渠を疵つけて地に落されたら、
立處に五體が砕けよう。が、此のまゝにしても生命
はあるまい。何う處置しようと猶豫ふうちに、一打
ち煽つて又飛んだ。飛びつゝ、いつか地にやゝ近く、
ものゝ一二間を掠めると見た時、此の沈勇なる少年
は、脇指を引抜きざまにうしろ突にザクリと突く。
弱る處を、呼吸もつかせず、三刀四刀さし通したの
で、弱果てゝ鷲が仰向けに大地に伏す、伏しつゝ仰
向けに翻る腹に乗つて、柔い羽根蒲團に包まれたや
うに、ふはふはと落ちた。

恰も鷲の腹からうまれたやうに、少年は血を浴び
て出たが、四方、山また山ばかり、山嶽重疊として
更に東西を辨じない。

とぼ／＼と辿るうち、人間の木樵に逢つた。木樵
は繪の如く斧を提げて居る。進んで禮して、城下を
教へてと言つて、且つ道案内を頼むと、城下とは何
んぢやと言つた。お城を知らないか、と言ふと、知
んねえよ、とけろりとして居る。薄給でも其の頃の

官員くわんあんの倅せがれだから、向むかう見みずに腹はらを立て、鹿兒島かごしまだ
い、と大おほきく言いふと、鹿兒島かごしまとは、何處どこぢやと言いふ。
おのれ、日本にほんの薩摩國さつまのくに鹿兒島かごしまを知らぬかと呼よばゝる
と、伸のび／＼とした鼻はなの下したを漸やつと縮ちぢめたのは、大おほき
口くちを開あけて呆あきれたので。薩摩さつまは此處ここから何千里なんりある
だい、と反對あへこへに尋たづねたのである。少年せうねんも少すこし心着こころづい
て、此處ここは何處どこだらう、と聞きいた時とき、はじめに知しつ
た。木曾きその山中やまなかであつたのである。

此處ここで、二人ふたりで、始はじめて驚わしの死體したいを見みた。

麓ふもとへ連つれ下くだつた木樵きせりが、やがて庄屋しやうやに通つうじ、陣屋ぢんやに
知しらせ、郡こほりの醫師いしを呼よぶ騒さわぎ。精神せいしんにも身からだ體だにも、
見事みごと異状いじやうがない。

――鹿兒島かごしままで、及およぶべきやうもないから、江え
戸どの薩摩屋敷さつまやしきまで送届おくりこけた。

朝あさ五ごつ時とき、宙ちゆうに釣つられて、少年せうねんが木曾山きそさん中ちゆうで驚わしの
爪つめを離はなれたのは同じ日おなひの夕ゆふへ。七しちつ時とき、間あひだは五いっ時とき十じか
間かんである。里數りすうは略々ほゞ四百里りであると言いふ。

―― 驚でさへ、まして天狗の業である。また武士が刀を抜いて居たわけも、此の邊で大抵想像が着くであらう。―― ものには必ず對がある、次手に言はう。―― 是と前後して近江の膳所の城下でも驚が武士の子を攫つた―― 此は馬に乗つて馬場に居たのを鞍から引掴んで上つたのであるが、此の時は湖水の上を颯と伸した。刀は抜けて湖に沈んで、小刀ばかり帯に残つたが、下が陸に成つた時、砂濱の渚に少年を落して、驚は目の上の絶壁の大巖に翼を休めた。しばらくして、どつと下いて、少年に飛かゝつて、顔の皮を筆りくらはんとする處を、一生懸命脇差でめくら突きにして助かつた。人に介抱されて、後に、所を聞くと、此の方は近かつた。近江の湖岸で、里程は二十里。―― 江戸と箱根は是より少し遠い。

それから、人間が空をつられて行く状に參考になるのがある。……此は見たものゝ名が分つて居る。讃州高松、松平侯の世子で、貞五郎と云ふのが、近習たちと、濱町矢の倉の邸の庭で、凧を揚げ遊んで居た。

些と寒いほどの西風で、凧に向つた遙か品川の海
の方から、ひら／＼と紅いものが、ぼつちりと見え
て、空中を次第に近づく。唯、眞逆になつた女で、
髪がふはりと下に流れて、無慙や眞白な足を空に、
顔は裳で包まれた。ヒイと泣叫ぶ聲が悲しげに響い
て、あれ／＼と見るうちに、遠く筑波の方へ霞ん
で了つた。近習たちも皆見た。丁ど日中で、然も空
は晴れて居た。――膚も衣もうつくしく蓑蟲が
ぶらりと雲から下つたやうな女ばかりで、他に何も
見えなかつた。が、天狗が掴んだものに相違ない、
と云ふのである。

けれども、こゝなる兩個の魔は、武士も屑屋も逆
に釣つたのではないらしい。

五

「ふむ、……其處で肝要な、江戸城の趣は如何であつたな。」

「いや以ての外の騒動だ。外濠から龍が湧いても、天守へ雷が轉がつても、太鼓櫓の下へ屑屋が溢れたほどではあるまいと思ふ。又、此の屑屋が興がった男で、鐵砲箆を擔いだまゝ、落ちた處を俯向いて、籠鷲のやうに、竹の箆で其處等をつつきながら、胡亂々々する。……此を高櫓から蟻が葛籠を背負つたやうに、小さく眞下に覗いた、係りの役人の吃驚さよ。陽の面の蝕んだやうに目が眩んで、折からであつた、八つの太鼓を、ドーン、ドーン。」

と小法師なるに力ある聲が、湖水に響く。ドーンと、もの凄く訝して、

「ドーン、ドーンと十三打つた。」

「妙。」と、又乗出した山伏が、

「前代未聞。」と言の尾を沈めて、半ば歎息して云つた。

「謀叛人が降つて湧いて、二の丸へ取詰めたやうな騒動だ。將軍の住居は大奥まで湧上つた。長袴はいなる、上下は蹴躑く、茶坊主は轉ぶ、女中は泣く。追取刀、槍、薙刀。そのうち騎馬で乗出した。何と、紙屑買一人を、鐵砲づくめ、槍襖で捕へたが、見ものであつたよ。――國持諸侯が虱と合戦をするやうだ。」

「眞か、それは？」

「云ふにや及ぶ。」

「あゝ幕府の運命は、それであらかた知れた。」

――

「む、大納言殿御館では、大刀を抜いた武士を、手弱女の手一つにて、黒髪一筋亂さずに、もみぢの廊下を毛蟲の如く撮出す。」

「征夷大將軍の江戸城に於ては、紙屑買唯一人を、老中はじめ合戦の混亂ぢや。」

「京都の御ため。」

と西に向つて、草を拂つて、秋葉の行者と、羽黒

のこほふし小法師、揃そろつて、手てを支ついて敬けい伏ふくした。

「小せいちゅう蟲、微び貝ばいの臣しん等ら・・・・・」

「欣きん幸かう、慶けい福ふく。」

「謹つしんで、萬ばん歳ざいを祝しゆくし奉たてまる。」

「さて、……町奉行が白洲を立て、驚いた。召捕つた屑屋を送るには、槍、鐵砲で列をなしたが、奉行役宅で突放すと暮ほどの働きもない男だ。横から視ても、縦から視ても、汚い屑屋に相違あるまい。奉行は繼上下、御用箱、うしろに太刀持、用人、與力、同心徒、事も嚴重に堂々と並んで、威儀を正して、ずらりと蝋燭に灯を入れた。」

灯を入れて、更めて、町奉行が、餘の事に、櫓下を胡亂ついた時と、同じやうな状をして見せる、とな、それも吟味の手段とあつて、屑屋を立たせて、箆を背負はせて、煮しめたやうな手拭まで被らせた。が、猶の事だ。今更ながら、一同の呆れた處を、廂を跨いで倒に覗いて狙つた愚僧だ。つむじ風を哄と吹かせ、白洲の砂利をから／＼と掻廻いて、パツと一齊に灯を消した。逢魔ヶ時の暗まぎれに、ひよいと掴んで、空へ抜けた。お互に此處等は手軽い。」

「いや、しかし、御苦勞ぢや。其處で何か、すぐ

に羽黒へ歸らいで、屑屋を掴んだまゝ、御坊關所近く參られたは、其の男に後難あらせまい遠慮かな。」

「何、何、愚憎が三度息を吹掛け、あの身體中まじなうた。屑買が明日が日、奉行の鼻毛を抜かうとも、嚏をするばかりで、一向に目は附けん。其處に聊も懸念はない。が、正直な氣のいゝ屑屋だ。不便や、定めし驚いたらう。………勞力やすめに、京見物をさせて、大佛前の餅なりと振舞はうと思つて、足ついでに飛んで來た。が、いや、先刻の、それよ。………城の石垣に於て、大蛇と捏合うた、あの臭氣が脊筋から脇へ纏うて、飛ぶほどに、駈けるほどに、段々堪らぬ。よつて、此の大盃で、一寸行水をばちや／＼遣つた。」

愚僧は好事——お行者こそ御苦勞な。江戸まで、あの荷物を送と見えます。——武士は何とした、心が萎えて、手足が突張り、殊の外疲れたやうに見受けるな。」

「おゝ、其の武士は、部役のほか、仔細あつて、

些と灸を用ゐたのぢや。」

「道理こそ、……此は暑からう。待て／＼、お行者。灸と言へば、煙草が一吹し吹したい。丁ど、あの岨道に螢ほどのものが見える。獵師が出たな。火繩らしい。借りるぞよ。來い。」

とハタと掌を一つ打つと、遙に隔つた眞暗な渚から、キリ／＼と舞ひながら、森を潜つて、水の面を舞つて來るのを、小法師は指の先へ宙で受けた。つはぶきの葉を喇叭に卷いたは、即ち煙管で。蘆の穂といはず、草と言はず筆取つて、青磁色の長い爪に、火を翳して、ぶく／＼と吸つけた。火繩を取つて、うしろ状の、肩越に、ボン、と投げると、杉の枝に挟まつて、ふつと消えたと思つたのが、めら／＼と赤く燃上つた。ぱち／＼と鳴ると、雙子山嵐颯轟と響いて、凡そ片輪車の大きさに火の搦んだのが、梢に掛つて、ぐる／＼／＼ぐると廻る。

此の火に照された、二個の魔神の状を見よ。けた／＼ましいい人聲幽に、鐵砲を肩に、獵師が二人のめりつ、

反りつ、尾花の波に漂うて森の中を遁げて行く。

「山兔が二三疋、あとを追ふやうに、躍つて駈けた。

「小法師、あひかはらず悪戯ぢや。」

と兜のやうな額皺の下に、恐しい目を光らしながら、山伏は赤い鼻をひこ／＼と笑つたが、

「拙道、煙草は不調法ぢや。然らば相伴に腰兵糧を使はうよ。」

と胡坐かいた片脛を、づかりと投出すと、兩手で逆に取つて、上へ反せ、膝ぶしからポキリポキリ、ミシリとやる。

「うゝ、うゝ。」

「あつ。」

と、武士と屑屋は、思はず聲を立てたのである。

見向きもしないで、山伏は挫折つた其の己が片脛を驚掴みに、片手で踵が穿いた板草鞋を捲り棄てる
と、横銜へに、ばり／＼と嚙る

鮮血なまちの、脣くちびるを滴々たら／＼と傳つたふを視みて、武士さむらいと屑屋くづやは一
のめりに突伏つゝぶした。

不思議ふしぎな事ことには、へし折をつた山伏やまぶしの片脛かたすねのあとに
は、又またおなじやうな脛すねが生はえるのであつた。

杉すぎなる火ひの車くるまは影かげを滅けした。寂寞せきばくとして一層そうもの
凄すこい。

「骨ほねも筋すぢもないわ、肝魂きもたましひも消きえて居ゐる。不便ふびんや、
武士さむらい……詫わびをして取とらさうか。」

と小法師こほふしが、やゝもの静しづかに、
「お行者おぎやうじやよ。灸きうとは何なにかな。」

此の間に――

「鹽辛い。」

と言ふ山伏の聲がして、がぶ／＼。

「鹽辛い。」

と言つて、湖水の水を、がぶ／＼と飲んだ――

「お行者。」

「其の武士は、小堀傳十郎と申す――陪臣

なれど、それとても千石を食むのぢや。主人の殿は

松平大島守と言ふ……」

「西國方の諸侯だな。」

「されば御譜代。將軍家に、流も源も深い若年寄

ぢや。……何と御坊。……今度、其の

若年寄に、便宜あつて、京都比野大納言殿より、

江戸隅田川の都鳥が見たい、一羽首尾ようして送

られよ。」と云ふお頼みがあつたと思へ。――

御坊の羽黒、拙道の秋葉に於ても、旦那たちがこ

の度の一儀を思ひ立たれて、拙道等使に立つたも此

のためぢや。申さずとも、御坊は承知と存ずるが。」

「はあ、然うか、いや知らぬ、愚僧早走り、早合
點の癖で、用だけ聞いて、して来いな、とお先ばし
りに飛出たばかりで、一向に仔細は知らぬ。が、扨
は、根ざす處があるのであつたか。」

「もとよりぢや。——大島守が、此の段、殿
中に於て披露に及ぶと、老中はじめ額を合せて、
「此は今めかしく申すに及ばぬ。業平朝臣の（名
にしおはゞいざことゝはむ）歌の心をまのあたり、
鳥の姿に見たいと言ふ、花につけ、月につけ、をり
からの菊紅葉につけての思ひ寄には相違あるま
い。……大納言心では、將軍家は、其の風流
の優しさに感じて、都鳥をば一番、そつと取り、紅、
紫の房を飾つた、金銀蒔繪の籠に据ゑ、使も狩衣に
烏帽子して、都にのぼす事と思はれよう。ぢやが、
海苔一帖、煎餅の袋にも、贈物は心すべきぢや。す
ぐに其は對手に向ふ、當方の心持が表が相成
る。……將軍家へ無心とあれば、都鳥一羽も、
城一つも同じ道理ぢや。よき折から京方に對し、關

東の武威をあらはすため、都鳥を射て、鴻の羽、鷹の羽の矢を胸さきに裏搔いて貫いたまゝを、故と、蜜柑箱と思ふが如何、即ち其の昔、権現様戰場お持出しの矢疵彈丸痕の残つた鎧櫃に納めて、槍を立て、使者を送らう。と言ふ評定ぢや。」

「氣障な奴だ。」

「むゝ、先づ聞けよ。——評定は評定なれど、此を發議したのは今時の博士、秦四書頭と言ふ親仁ぢや。」

「あの、親仁。……豫て大島守に取入ると聞いた。成程、其邊の催しだな。積つても知れる。老耄儒者めが、家に引込んで、溝端へ、桐の苗でも植ゑ、孫娘の嫁入道具の算段なりとして居れば濟むものを——いや、何時の世にも當代におもねるものは、當代の學者だな。」

「鹽辛い……」

と山伏は、又したゝか水を飲んで、

「其處でぢや……松平大島守、邸は山ぢや

が、別荘が本所大川べりにあるに依り、かた／＼大島守が都鳥を射て取る事に成つた。・・・此の殿、聊かものゝ道理を辨へてゐながら、心得違ひな事は、諸事萬端、おありがたや關東の御威光がりでな。――一年、比野大納言、まだお年若で、京都御名代として、日光の社參に下られたを響應して、歸洛を品川へ送るのに、資治卿の装束が、藤色なる水干の裾を曳き、群衛を白く染出だせる浮紋で、風折烏帽子に紫の懸緒を着けたに負けない氣で、此大島守は、紺染の鎧直垂の下に、白き菊綴なして、上には紫の陣羽織。胸をこはせ掛にて、後へ折開いた衣紋着ぢや。小袖と言ふのは、此れこそ見よがしで、嘗て將軍家より拝領の、黄なる地の綾に、雲形を萌葱で織出し、白絲を以て葵の紋着。

「うふ。」
と小法師が噴笑した。

「何と御坊。――資治卿が胴袖に三尺もしめぬものを、大島守其の装で、馬に騎つて、資治卿の駕籠と、演戲がゝりで向合つて、どんなものだ、と

ニタリとした事がある。」

「氣障な奴だ。」

「大島守は、おのれ若年寄の顯達と、將軍家の威光、此見よがしの上に、――豫て、資治卿が美男におはす、従つて、此の卿一生のうちに、一千人の女を樂む念願あり、また婦人の方より恚と知りつゝ争つて媚を捧げ、色を呈する。専ら當代の在五中將と言ふ風説がある。――いや大島守、また相當の色男がりぢやによつて、一つは其嫉みぢや……負けまい氣ぢや。」

されば、名にしおはゞの歌につけて、都鳥の所望にも、一つは曲つたものと思つて可い。

また此の、品川で、陣羽織菊綴で、風折烏帽子紫の懸緒に張合つた次第を聞いて、――例の天下の博士めが、「遊ばされたり、老生も一度其の御扮装を拝見。」など、申す。

處で今度、隅田川兩岸の人拂、いや人よせをして、

件の陣羽織、菊綴、葵紋服の扮装で、拝見ものゝ博
士を伴ひ、弓矢を日置流に手ばさんで靜々と練出し
た。飛びも、立ちもすれば射取られう。こゝに可笑
な事は、折から上汐満々たる・・・蘆の湖は波
一條、銀河を流す氣勢がした。

かの隅田川に、唯一羽なる都鳥があつて、雪なす
翼は、朱鷺色の影を水脚に引いて、すら／＼と大島
守の輝いて立つ袖の影に入るばかり、水岸へ寄つて
來た。

「はて、それはな？」

「誰も知るまい。——大島守の邸に、今年二
十になる「白妙。」と言つて、白拍子の舞の手
だれの腰元が一人あるわ——一年・・・資
治卿を響應の時、酒宴の興に、此の女が一さし舞つ
た。——ぢやが、新曲とあつて、其の今様は、
大島守の作る處ぢや。」

「迷惑々々。」

「中に（時鳥）何とかと言ふ一句がある。——

白妙しろたへが（時鳥ほととぎす）とうたひながら、扇あふぎをかざして膝ひざをついた。時ときしも屋やの棟むねに、時鳥ほととぎすが——
せいしたのぢや。大島守おほしまのかみの得意とくい、察さつするに餘あまりある。……ところが、時鳥ほととぎすは勝手かたてに飛とんだので、……こゝを聞きけ、御坊ごぼうよ。

白妙しろたへは、資治卿やすはるきやうの姿すがたに、恍惚うつとりと成なつたのぢや。

大島守おほしまのかみは、折をりに觸ふれ、資治卿やすはるきやうの噂うはなをして、……その千人せんじんの女をんなに契ちぎると言いふ好色かうしよくをしたゝかに置のしると、……二人ふたり三人にんの妾めかけてかけ妾……故わざとか知らぬ、横肥よこぶちりに肥ふとつた乳母うっぱまで、此これを聞きいて爪つまはじき、身みぶるひをする中うちに、白妙しろたへ唯一たゞひとり人、……でも。……とか申まをして、内々ない／＼思おもひをほのめかす、大島守おほしまのかみは勝手かたてが違ちがふ上うへに、おのれ容色きりやうじまん自慢だけだけに、いまだ無理口説むりくどきをせをずに居をる。

其その白妙しろたへが、めされて都みやこに上のぼると言いふ、都鳥みやこどりの白おし粉るいの胸むねに、ふつくりと心魂こころたましひを籠こめて、肩かたも身みも翼つばさに入れて憧あこがれる……其その都鳥みやこどりぢや。何なんと、遁にげる處ところではあるまい。——しかし、人間にんげんには此これ

は解らぬ。」

「むゝ、聞えた。」

「都鳥は手とらまへぢや。藏人の鷲ならねども、手どらまへた都鳥を見て、將軍の御威光、殿の御徳とまでは仔細ない、――別荘で取つて歸つて、羽ぶしを結へて、櫻の枝につるし上げた。何と、雪白裸身の美女を、梢に的にした面影であらうな。松平大島守源の何其、矢の根にしるして、例の菊綴、葵の紋服、きり／＼と絞つて、兵と射たが、射た、射たが、薩張當らぬ。」

尤も、此の無慙な所業を、白妙は泣いて留めたが、聽かれさうな筈はない。

拝見の博士の手前――二の矢まで射損じて、殿、佛然とした處を、
「やあ、飛鳥、走獸こそ遊ばされい。恚る死的、殿には弓矢の御恥辱。」
「と呼ばゝつて、ばら／＼と、散る返咲の櫻とゝもに、都鳥の胸をも射抜いたるは……鹽辛い。」

と山伏は又湖水を飲む音。舌打しながら、
「ソレ、其處に控へた小堀傳十郎、即ち彼ぢ
や。．．．．．拙道が引搦んだと申して、決して不
忠不義の武士ではない。まづ言はゞ大島守には忠臣
ぢや。」

さて、處で、矢を貫いた都鳥を持つて、大島守登
營に及び、將軍家一覽の上にて、如法、鎧櫃に納め
た。

故と、使者差立てるまでもない。ぢやが、大納言
の卿に、將軍家よりの御進物。よつて、九州へ歸國
の諸侯が、途次の使者兼帶、其の武士が、都鳥の宰
領として、罷出て、東海道を上つて行く。．．．．

秋葉の旦那、つむじが曲つた。颯風の如く、御坊
の羽黒と氣脈を通じて、またゞく間の今度の催。拙
道は即ち仰をうけて、都鳥の使者が濱松の本陣へ着
いた處を、風呂にも入れず、縁側から引攪つた。

――武士の這奴の帯の結目を搦んで引釣ると、
齊しく、金剛杖に持添へた鎧櫃は、とてもの事に、

狸^{たぬき}が出て、棺桶^{くわんけ}を下^さげると言^いふ、古槐^{ふるえんじゆ}の天邊^{てつべん}へ掛^かけ置^おいて、大井^{おほゐ}、天龍^{てんりう}、琵琶湖^{びはこ}も、瀬多^{せた}も、京^{きやう}の空^{そら}へ一^{ひと}飛^{とび}ぢや。」

と又^{また}がぶりと水^{みづ}を飲^のんだ。

「時に、．．．．．時^{とき}にお行^ま者^{やうじ}。矢^やを貫^ついた都鳥^{みやうどり}は何^{なん}とした。」

「それぢや。．．．．．櫻^{さくら}の枝^{えだ}に掛^かつて、射^い貫^ぬれたとゝもに、白妙^{しろたへ}は胸^{むね}を痛^{いた}めて、どつと．．．．．息^{いき}も絶^{たえ}々の床^{とこ}に着^ついた。」

「南無^{なむ}三寶^{さんぼう}。」

「あはれと思^{おぼ}し、峰^{みね}、山^{やま}、嶽^{たけ}の、姫^{ひめ}たち、貴^き夫人^{ふじん}たち、届^とかぬまでもとて、目下^{もくか}御^ご介^{かい}抱^は遊^{あそ}ばさるゝ。」

「珍^{ちん}重^{ちやう}。」

と小^こ法^{ほふ}師^しが言^いつた。

「いや、安^{あん}心^{しん}は相^あ成^ひらぬ。が、かた／＼の御^ご心^{しん}もじ、御^お如^{じよ}才^{さい}はないかに存^{ぞん}ずる。やがて、此^この湖^{こしやう}上^うにも白^{しろ}い姿^{すがた}が映^{うつ}るであらう。——水^{みづ}も、夜^よも、さ

て更ふけた。―― 武士さむらひ。」

と呼よんで、居ゐ直なつて、

「都みやこ鳥とりもし蘇よみがへ生ならず、白しろ妙たへなきものと成ならば、大おほし島まの守かみを其そのまゝに差さ置おかぬぞ、と確しかと申まをせ。いや、大おほし待まて、必かならず誓ちかつて人ひとには洩もらすな。―― 拙せつ道だうの
手てに働はたらかせたれば、最も早はや汝そちは差さ許ゆるす。小堀こぼり傳でん十郎じゅうらう
、確しかとせい、傳でん十郎じゅうらう。」

「はつ。」

と武さむらひ士ひは、魂たましひとゝもに手てを支ついた。こゝに魂たましひと云い
ふは、兩りゅう刀たうの事ことではない。

「何と御坊」
と、少時して山伏が云つた。

思ひ懸けず、恚る處で行逢うた、互の便宜ぢや。
雙方、彼等を取替へて、御坊は羽黒へ歸りついでに、
其の武士を釣つて行く、拙道は一翼、京へ伸して、
其の屑屋を連れ參つて、大佛前の餅を食はさうよ
―― 御坊の厚意は無にせまい。」

「よい、よい、名案。」

「參れ。……屑屋。」

と山の襷を霧の包むやうに枯蘆にぬつと立つ、
此の大なる魔神の裾に、小さくなつて、屑屋は頭か
ら領伏して手を合せて拜んだ。

「お慈悲、お慈悲でござります、お助け下さいまし。」

「これ、身は損なはぬ。ほね休めに、京見物をさ
して遣るのぢや。」

「女房、女房がござります。兒がござります。」

「何として、箱根から京まで宙が飛いませう。江戸へ歸りたう存じます。……お武家様、

助けて下せえ……」

と膝行り寄る。半ば夢心地の肩屋は、前後の事を知らぬのであるから、武士を視て、其の劍術に絶つても助かりたいと思つたのである。

小法師が笑ひながら、塵を拂つて立つた。

「可厭なものは連れては參らぬ。いや、お行者御覽の通りだ。御苦勞には及ぶまい。——屑屋、法衣の袖を取れ、確と取れ、江戸へ歸すぞ。」

「え、滅相な、お慈悲、慈悲でござります。山を越えて參ります。歩行いて歸ります。」

「歩行けるかな。」

「這ひます、這ひます、這ひまして歸ります。地を這ひまして歸ります。其の方が、どれほどお情か分りませぬ。」

「は、氣まゝにするが可い、―― 然らば入交つて、…… 武士、武士、愚僧に縋れ。」
「恐れながら、恐れながら拙者とても、片時も早く、もとの人間に成りまして、人間らしく、相成りたう存じます。峠を越えて戻ります。」

「心のまゝぢや。―― 御坊。」

と山伏が式臺した。

「お行者」

「少時、少時何うぞ。」

と蹲りながら、手を擧げて、

「唯今、思ひつきました。此には海内第一のお關所がございます。拙者券を持ちませぬ。夜あけを待ちましても同じ儀ゆゑに…… 八々と當惑を仕ります。」

武士はきつぱり正氣に返つた。

「仔細ない。久能山邊に於ては、森の中から、時々、（興津鯛が食べたい、燈籠の油がこぼれるぞよ。） なぞと聲の聞える事を、此邊でもまざ／

と信じて居る。――關所に立向つて、大音に
（權現が通る。）と呼ばゝれ、速に門を開く。」

「恐れ……恐多い事――承りまするも
恐多い。陪臣の分を仕つて、御先祖様お名をかたり
ます如き、血反吐を吐いて即死をします。」
と、わな／＼と震へて云つた。

「臆病もの……可し。」

「計らひ取らせう。」

同音に、

「關所！」

と呼ぶと、向うから歩行くやうに、する／＼と眞
夜中の箱根の關所が、霧を被いて出て來た。

「山伏の首が、高く、鎖した門を、上から俯向い
て見込む時、小法師の姿は、ひよいと飛んで、棟木
に蹲んだ。」

「權現ぢや。」

「罷通るぞ！」

哄と笑つた。

小法師の姿は東の空へ、星の中に法衣の袖を搔込んで、うつむいて、すつと立つ、早走と云つたのが、身動きもしないやうに、次第々々に高く上る。山伏の形は、腹這ふ状に、金剛杖を權にして、横に霧を漕ぐ如く、西へふは／＼、くるりと廻つて、ふは／＼と漂ひ去る。・・・

唯、仰いで見るうちに、數十人の番士、足輕の左右に平伏す關の中を、二人何の苦もなく、うか／＼と通り抜けた。

「お武家様、もし、お武家様。」

「ハツとしたやうに、此の時、刀の柄に手を掛けて、もの／＼しく見返つた。が、汚い屑屋に可厭な顔して、

「何だ。」

「お袂に縫りませいで、一足も歩行かれませぬ。」

「ちよつ。參れ。」

「お武家様、お武家様。」

「黙つて参れよ。」

小湧谷、大地獄の音を暗中に聞いた。

目の前の路に、霧が横に廣いのではない。するりと無紋の幕が垂れて、ゆるく絞つた總の紫が、地を透く内側の燈の影に、色も見えつゝ、ほのかに人聲が漏れて聞えた。

女の聲である。

時に、紙屑屋の方が、武士よりは、もの馴れた。

そして、跪かせて、屑屋も地に、並んで恭々しく手を支いた。

「江戸へ歸りますものにござります。山道に迷ひました。お通しを願ひたう存じます。」

ひっそりして、少時すると、

「お通り。」

と、もの柔な、優しい聲。

颯と幕が消えた。消ゆるにつれて、朦朧として、白小袖、紅の袴、また綾錦、振袖の、貴女たち四五

人の姿とゝもに、中に一人、雪に紛ふ、うつくしき裸體の女があつたと思ふと、都鳥が一羽、瑪瑙の如き大巖に湛へた温泉に白く浮いて居た。が、それも湯氣とゝもに蒼く消えた。

星ばかり、峰ばかり、颯々たる松の嵐の聲ばかり。

幽に、互の顔の見えた時、真空なる、山かづら、山の端に、朗な女の聲して、

「矢は返すよ。」

風を切つて、目さきへ落ちる、此が刺さると生命はなかつた。それでも武士は腰を抜いた。

引立てゝも、目ばかり働いて歩行き得ない。

屑屋が妙なことをはじめた。

「お武家様、此の策へお入んなせい。」

入れると、まだ天狗のいきの、ほとぼりが消えなかつたと見えて、鐵砲策へ、腰からすつぼりと納つたのである。

屑屋が腰を切つて、肩を振つて、其の策を背負つて立つた。

「屑くづい。」

うつかりと、・・・

「屑くづい。」

落ちた矢やを見ると、ひよいと、竹たけの箸はしではさんで拾ひろつて、癖くせに成なつて居ゐるから、策さるへ抛はふる。

鴻こうの羽はねの矢やを額ひたいに取とつて、蒼あせい顔かほして、頂いたゞきながら、武士さむらいは震ふるへて居ゐた。

【完】